

# まえがき

出張に行く途中の車中で、テープから次のような声が聞こえてきた。

例えば、あの中に、旗が沢山ありますね。「武士が戦いにいくのに、どうして背中に旗を立てて、戦ってるんだ」と考えたのです。旗は何のために必要だったのか、敵に対して旗があるのか、それとも味方の為にあるのかというのが疑問だったんです。

あの絵画とは、有名な「長篠の戦」である。その絵画を見ての疑問である。私は「なるほどね。そんな味方もあるなー。物好きな人もいるものだ。」と思ったものだ。

そういう発想で調べてみたら、全然違うんですね。旗は味方の為にあるのです。そして、それも自分の後ろの方の高い山の上に軍目付がいたのです。そういう人がいましてね、旗を見て、あの武士はどんな働きをしてるということを、「勤務評定」やってたんですね。勤務評定用の旗だということがわかってきたのです。ということは、その旗は敵よりも味方に、自分の後ろの味方に向かってコマースシャルをやったのです。武士のコマースシャル用の旗だということです。これが一つわかったらですね、「あら、これはおもしろいぞ」ということになるのです。

俄然、楽しくなってきたことを覚えている。もう、今から9年程前のことになる。当時の勤務校の教頭先生はNHKラジオ「教師の時間」を録音されていて、そのテープを私に貸して下さったのであった。（テープの内容は、有田和正著作『「追求の鬼」を育てる』16巻に載録してある）その時「有田和正」という名前を知った。「一寸法師」の授業も知った。

なぜ、こんな楽しい授業ができるのか。それも奇想天外な授業が！私もこんな授業がやってみたい。

まさしく、**コペルニクス的**授業観の転換だった。

追試した。そして、自分でもいろいろな歴史史料を持ってきては、それを授業した。授業が楽しくなってきた。「教師」という仕事が楽しくなってきた。

今までとといえば、歴史事象を確認するためにしか、教科書の史料など使ってこなかった。しかし、史料とは、それがあから歴史がわかるのであって

使い方が逆であったのだ。すなわち、今までは、研究者が研究した結果（歴史事象）しか授業してこなかったのだ。ここが、歴史学習を面白くないものにしてきた原因だったのだ。

上記のような楽しさを子ども達にも与えたい、と考えた。楽しさだけでなく、そこに到る方法も与えて、子ども達独自に学習していけないものか、と。

そこで、提案する。

## 解読型歴史の授業

単に歴史事象を子ども達に教えていくだけでは、歴史の醍醐味は教えられないと考える。やはり、その方法・過程も授業できたらなーと考える。

楽しい授業というのは、有田氏流に言えば、「ネタ」があるからだ。歴史の学習において、「ネタ」というのは、歴史を「読み取って」いく過程での産物だと考える。例えば、「長篠の戦」の絵画では、その絵画を見る目がネタにつながっている。すなわち、歴史（歴史史料）を「読み取って」いるのである。言葉を変えると、「解読」しているのである。

もちろん、いつもこんな授業ができるわけではない。むしろ、全105時間中の20時間、すなわち20%位だろう。しかし、こんな授業を増やしていくことによって、子ども達が主体となって、学習が進んでいくことであろう。

この本では、次のことを取り上げていく。

1. どうすれば、授業者として歴史史料を解読していけるか。
2. どうすれば、その解読したものを授業していけるか。
3. さらに、その解読の視点を子ども達にも与えて、歴史学習における自己教育力をつけていきたい。

その結果として、歴史事象の理解はできるし、人々のくらしや生き方・願い等も学習できるだろうと考える。

歴史は、まだ「未知」の部分が多い。（「誤認」の部分も多いのではなからうか。）それを将来、子ども達が自由な発想で解読できていたら、最高ではなからうか。そんな喜びを与えるような授業づくりができたらと考える。そのためには、歴史解読の過程を授業していくことである。名付けて、**解読型歴史の授業**である。

# あ と が き

「解説」というテーマで書いてきた。これまでに、「解説」という視点でたくさんの本が書かれてきた。法則化運動に関しては、

浜上薫 氏 『「分析批評」の授業づくり』他（明治図書）

横山駿也氏 『力をつける説明文の解説法』他（明治図書）

寺崎賢一氏 『暗号の解説』他（ " ）

岩本康裕氏 『名画鑑賞の授業』（ " ）

などの書籍群である。

浜上氏は、国語の物語文の解説として、分析批評で「教材分析「10」の観点」を示された。同じく寺崎氏も物語の解説において「裏」を読み取る」というキーポイントを示された。又、横山氏は、説明文と詩の解説において「文章解説学」を提唱された。一方、岩本氏は、図画工作科において、鑑賞の授業法を確立された。

私は、社会科にもこんな観点が必要ではと、考えるようになった。いや、こんな観点がなければ、歴史を子ども自らが解説していくような学習は無理だなと考えるようになった。それで、今回、7つの歴史解説の視点を提案してみたわけである。4年前から、少しずつ実践を積み重ねてきた。御批判頂きたい。

このヒントを頂いた有田和正氏、法則化運動代表の向山洋一氏、明治図書編集部の江部満、樋口雅子両氏に感謝の意を表したい。

1993年 夏 村上 浩一

## 目 次

まえがき	P	1
目次		4
<b>． 解 説 型 歴 史 授 業 の 提 案</b>		6
1．コペルニクスの授業転換		
2．有田氏の授業を追求する	3	
3．歴史を解説していく授業		
4．7つの歴史解説視点		

<b>． 絵画の解読とその授業</b>	2 2
1．絵解きの方法	
2．「元寇」を解読する	
3．絵画解読による授業	
4．授業実践記録	
<b>． 地名の解読とその授業</b>	4 8
1．地名の由来を考える	
2．世界史（地理）での地名の授業	
3．地名の参考図書	
4．授業実践記録	
<b>． 文献の解読とその授業</b>	6 9
1．『蒙古来襲絵詞』	
2．文献解読による授業	
3．授業実践記録	
<b>． 『モノ』の解読とその授業</b>	8 2
1．人間社会の代弁者＝『モノ』	
2．『モノ』をマンダラ図に	
3．授業実践記録	
<b>． 民俗史料の解読とその授業</b>	9 3
1．岩室甚句 VS 一寸法師	
2．民俗史料分析の6観点	
3．授業実践記録	
<b>． 考古学の利用とその授業</b>	1 0 8
1．推理と復元	
2．授業実践記録	
<b>． 一般資料を使った授業</b>	1 2 4
1．新聞を使う	
2．授業実践記録	
<b>． 子どもの歴史解読例</b>	1 3 7
1．社会見学での解読	4
2．西南戦争の解読	

